

親鸞仏教センター主任研究員定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅱ期・第 2 回（通算第 9 回）

第一章——先師口伝の大道（2）

加来 雄之

第一章

蓮如本	（安良岡康作『全講読』、ただし〔〕記号と傍線は加来が補った。）
一 弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。 弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらはれず、たゞ信心を要〈えう〉とすとしるべし。 そのゆへは、罪惡深重・煩惱熾盛〈至常〉の衆生をたすけんかための願にまします。 しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要〈えう〉にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。	一 阿弥陀仏の〔お立てになった〕誓願の、人間の思量を超えた、絶対的な力にお助けをこうむって、「浄土に往って生れることを果たすのだ」と信じて、〔口に「南無阿弥陀仏」という〕念仏を申し上げようという<u>思いが生ずる時</u>、即座に、一切の衆生を受け入れて救い取り、お捨てにならないというご利益に人間をお参加させになるのである。 この阿弥陀仏の根本の誓願におかせられては、老人と若い者、善い人と悪い人とおえらびにならない。〔ひとにとっては、〕ただ一つ、〔その本願への〕信心だけが必要なのだとよく心得なくてはならない。 そのわけは、犯す罪惡が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。 従って、弥陀の本願を<u>信じようとするに当って</u>は、ほかの善い行いも必要ではないのだ。念仏より優越する善い行いはないのであるから。また、悪い行いをも恐れてはならないのだ。〔阿弥陀仏の〕本願を妨害するほどの悪い行いはないのであるから。……

【前回の振り返り】

- ・『歎異抄』は先師口伝の真信に異なることを歎く書である。
- ・「歎異」のために、まずその基準となる「先師口伝の真信」を実現する大道を顕わすのが第一章である。

・この第一章の大道の受けとめが以下に展開する師訓篇と異義篇と述懐篇を理解するための基礎となる。

・唯円は、親鸞聖人が源空聖人を通して受けとめた「先師（源空聖人）口伝の真信」の大道を第一章に記されなければならなかった。

・第一章の分科は諸説あるが、大きく三段に分けることができよう。

妙音院了祥『聞記』

第一段 「弥陀の誓願」 述信心摂取

初、述他力信相

二、述行具信心

三、正述摂取益

第二段 「弥陀の本願」 述信心本願

初、述入信要不

二、引機信文証

第三段 「しかれば」 対異義固執

初、挙本願警覚

二、正解善悪執

一、先師口伝の真信の仏道。二、信心為要と本願の精神。三、本願の信心の要件もしくは信心による不退の利益。

IV 第一章第一段の検討（再説）

なぜ第一段は、「弥陀にたすけられる」や「弥陀にたすけられて摂取される」という表現ではいけなかったのであろうか。「弥陀にたすけられて」でも「弥陀の誓願にたすけられまいらせて」でもなく、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」と表現しなくてはならなかったのか。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ^て、
往生をとぐるなりと信じ^て、
念仏まふさんとおもひたつところのおこる^{とき}、
すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふ^{なり}。

一、「弥陀の」「誓願」「不思議」の意義。

「弥陀の」という言葉からはじまる意味はなにか。

「弥陀」について。弥陀は阿弥陀（梵語、アミターユス（無量寿）、アミターバ（無量光）の訳）の略。〈無量寿経〉であきらかにしようとする如来をあらわす名称。しかしなぜ経題に出る「無量寿仏」ではなく「弥陀」と呼ぶのか。

『尊号真像銘文』に準じて、より丁寧に表示するならば、〈無量寿経〉とは、「従

如来生」を四十八願成就の阿弥陀仏と説きたまえる仏説というべきなのである。

〈無量寿経〉には二種の阿弥陀仏が説かれている。方便として説かれた化仏としては西方浄土の仏として（狭い意味の弥陀）、真仏としては不可思議光如来と表現される（広い意味の弥陀）である。

狭い意味の阿弥陀仏 西方・阿弥陀仏
広い意味の阿弥陀仏 不可思議光如来

私たちは十方の諸仏如来の中から阿弥陀仏を選びとった。

私たちは「従如来生」のはたらきを阿弥陀と表現する〈無量寿経〉の伝統に立つことを欲するのである。

次に、なぜ「誓願」が必要なのか。

「誓願」とは、願と誓というよりも、誓われた願いという意味で理解したい。弥陀の願が、単なる願望ではなく、その願いを実現する約束するのが誓いということである四十八願文のそれぞれの末尾に置かれた「正覚を取らじ」という無縁の大悲の心が誓いであり、「タスケントオホシメシタチケル本願」の「おぼしめしたちける」が誓いの意欲をあらわしている。そこには「不取正覚」、そのことが実現しなければ正しい覚りを取ることはならないのだ、という切ない意（こころ）が感じ取ることができる。我々はそれを伝統の中に実感する。

ちなみに「本願」は因本・根本の願の意味。

第十八願でいうと、

「設我得仏」と「若不生者不取正覚」が誓いに、「十方衆生……乃至十念」までが願いに当たる。

「唯除五逆誹謗正法」は誓いが立てられた課題、換言すれば、〈無量寿経〉の如来大悲の深さをあらわすいうことができる。

なぜ「不思議」が必要なのか。

「不思議」は、心で思いはかることも語で言い表すこともできないこと。『大無量寿経』『阿弥陀経』には「不可思議」とあり、とくに親鸞の「不思議」の用法は『浄土論註』の解釈に基づく。

この「不思議」に『歎異抄』の立とうとする仏道の特徴がある。「弥陀にたすけられ」でもなく「弥陀の誓願にたすけられ」でもなく「弥陀の、誓願、不思議にたすけられ」と表現する、この「不思議」という一語がおかれたところに親鸞の独自の受け止めがある。（第十章や第十一章を参考に。またこの「不〔可〕思議」が親鸞の思想の特徴であることに注目して『歎異抄』を読もうとしたのが寺川俊昭の『歎異

抄の解明』である。)

法然には「如来のはからいであって凡夫がはからうことではない」という趣旨の言葉はある。



安良岡は「「助けられ参らせて」は、お助けをこうむって。「られ」は受身、「参らす」は、謙譲の意を表す。従って、この語句は「助けられて」という単なる受身の意味でもなく、「お助け申し上げて」という、相手に対してへりくだって言う謙譲の意味でもない。」(安良岡『全講読』四八頁)と述べている。

一、「たすけられまいらせて」の「たすけ」とは何か。

「タスケ」は、「《タは手、スケは助力する意》」(岩波古語辞典)であり、それに対して、スクヒは「①くぼみのあるもので物をしゃくってとる。②陥った危難からたすける。」(岩波古語辞典)の意である。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ」ることは「摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」とどのような関係にあるのか。

親鸞の用例：「弥陀の御ちかひをときてよろずの衆生をたすけすくはむとおぼしめすとしるべし」(『尊号真像銘文』広本)、

蓮如の用例：「一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいしますべし。これすなわち第十八の念仏往生の誓願のころなり。」(第五帖[第一通] 末代無智)

曾我量深は、「回向というは、弥陀如来の、衆生を御たすけをいうなり」(『蓮如上人御一代記聞書』聖典八六二)の文を引いて「仏教のおたすけは、回向である」「おまかせする」と押さえている。回向がたすけならば、すくいは摂取であろう。

たすけ……回向

すくふ……摂取

またこの文はどこに続くのか。何を「たすけ」るのか？

「たすけられまいらせて、往生をばとぐる」か？

「たすけられまいらせて……信じて」か？

一、「往生をばとぐるなりと」

「往生」とは、阿弥陀仏の浄土に往き生まれることである。サンスクリットの原語は「生」と同じであったとして区別が必要ないという見解も示されるが、經典の翻訳者、すくなくとも曇鸞は「生」と「往生」を区別して使用した可能性があると私は考えている。

私は、往生が浄土に往生生まれることであるとすれば、その浄土をどのように考えるかが往生の理解をも決定すると思う。浄土は、穢土の外にある世界か、浄土は穢土を包む世界か。

また「往生」を「とぐるなり」と、「トグル」という「果遂」の意が付せられているのは、そこに「生涯をつくす」（畢命を期とする）という意味が含まれてくるのではないか。

「往生」を語るときに、命終ということが問題になるのは、そこに退転すると現実があったのであり、退転せずに素懷を遂げることが課題となるからではないか。（『御消息』などを参照。）

また「往生するなり」と「往生をば遂ぐるなり」とは、厳密には区別することが必要かもしれない。

一、「信じて」とは何を信じるのか。

（ア）『弥陀の誓願不思議のお助けをこうむって往生をとげるのだ』と信じて」の意か。

（イ）「弥陀の誓願不思議のお助けをこうむって、『往生をとげるのだ』と信じて、」の意か。

信じる内容は、（ア）か、（イ）か。

他力の信か、他力回向の信か。

一、「念仏まふさんとおもひたつところのおこるとき」

この「念仏まふさんとおもひたつところのおこる」に「信じて」の具体性がある。信は何かの対象への信仰ではなくして、信において私のなかに「念仏せんと思ひ立つところ」、真の心が発起するのである。念仏もうさんとおもいたつところがおこってくる、そのときに信が信として心において成就する。

そして「念仏もうさんとおもいたつところ」に「摂取不捨の利益にあづけしめたまふ」という人生の意味が成り立つ。

「念仏まふさん」とは、『観無量寿経』の伝統における衆生の称名念仏である。その念仏は口称念仏であり、その伝統のなかから生れた言葉である。ここでは「念仏をまふさん」ではない。法然上人の言葉にもとづく、例えば「一向心念仏申、無疑往生思、即三心具足也、」（醍醐本、法然上人伝全集、七八三頁）など。その念仏は聖道の念仏、人間の努力や能力や意欲に基づく念仏と峻別されなくてはならない。

「もろこし、我がちょうに、もろもろの智者達のさたし申さるる観念の念にも非ず、又、学文して念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ極楽往生のためには、南

無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。」(『一枚起請文』、『聖典』九六二頁)

ただ親鸞の解釈としては「名号を称すること下至十声聞などに及ぶまで」(聖典二二二頁)と聞として成り立つ称名、また帰命を「本願招喚の勅命」と受けとめることなどから、次の「まふさんとおもひ たつころのおこるとき」という表現が生れる。

一、「おもひたつ」

「まふさんとおもひたつころ」と「たすけんとおぼしめしたちける本願」(後述)との呼応関係。本願は「たすけんとおぼしめしたちける」ところの清浄意欲であるがゆえに、「まふさんとおもひたつころ」は、つまりその本願の意欲にめざめることの外にはない。

一、「ころのおこるときすなはち」

この「ココロ (心)」は前の「信じて」と響きあって信心という語を形成する。弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて…おこるとき」までは「如来よりたまわりたる信心」を語るものであろう。

「ときすなわち」は、「時、即ち」の意。「そのときただちに、即ちに、すぐに」の意味。「時熟」ということを参照に。

安田理深「時熟」(『親鸞教学』第九号、一九六六年、『歎異抄』特集号を参照。『安田理深選集』第一巻所収)

一、「摂取不捨の利益」

「摂取不捨」は『観無量寿経』の真身観に出る表現であり、源空・親鸞の他力の浄土教においてすくいを表現する重要な概念である。とくに親鸞は「摂取不捨」を浄土宗における真実のすくいを表現する概念として重視した。

『浄土和讃』弥陀経意・「摂取してすて」の左訓「せふはものゝにくるをおわえとるなり」(『定本』Ⅱ・五一頁) また、

「「摂取不捨」ともうすは、「摂」は、おさめるという、「護」は、ところをへだてず、ときをわかず、ひとをきらわず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまうとなり。まもるといふは、異学異見のともがらにやぶられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、悪鬼悪神なやますことなしとなり。「不捨」といふは、信心のひとを、智慧光仏の御ころにおさめまもりて、心光のうちに、ときとしてすてたまわずと、しらしめんともうす御のりなり。」(『一念多念文意』聖典五三八頁)

一、「あづけしめたまふなり」

「預（あづ）く」は、他動詞で、加わらせる、参加させる。「しめはまふ」は、使役の助動詞が尊敬の意に転じ、おなじく尊敬の助動詞「たまふ」と結びついて最高の尊敬をあらわし、文末の「なり」は断定・確説の意を表す助動詞で、のである、のだ、の意。（安良岡四九頁）「物や人の管理を一時他の人にゆだねる」こと。（岩波古語辞典）また参与させる、参加させる意とされる。

この「摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」には、親鸞がすくいの実感が、「摂取不捨」という仏の功德と「あづけしめたまふ」という私たちの利益との関係として厳密にあらわされている。

一、第一章第一段が、「弥陀にすくわれて往生すると信じて念仏するとき摂取不捨される」という文章との違い。

一、第二段への展開。第一段の中の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、……信じて」の「信じて」の内実を展開するのが、「弥陀の本願には」から始まる第二段・「本願を信ぜんには」から始まる第三段であろう。